

# 社交不安に対する注意バイアス修正トレーニングの効果に 状態不安が与える影響

○松本美涼・吉良悠吾・尾形明子  
(広島大学大学院教育学研究科)

## 問題

社交不安症は、よく知らない人に会うといった他者によって注目されるかもしれない社会的状況に対する著明または強烈的な恐怖または不安を特徴する疾患である(APA, 2013)。社交不安者の不安を形成する要因として、脅威的な情報に対して引き付けられ、それにそこから注意を引き離すことが難しいといった注意バイアスが挙げられる(Bar-haim et al., 2007)。Macleod et al.,(2002)は、注意バイアスを修正することを目的とし、注意バイアス修正トレーニング(以下、ABM)を提案しているが、社交不安症に対するABMの効果を検討した研究の結果は、一貫していない(e.g, Amir et al., 2008; Carlbring et al., 2012)。注意バイアスは、状態不安が高まった状態でのみ生じることが報告されており(e.g, Garner et al., 2006)、状態不安を高め、注意バイアスが生じた状態でABMを行うことで、注意バイアスが修正され社交不安症状が低減すると考えられる。しかし、先行研究ではABM中の状態不安の程度は検討されていない。そこで、本研究では、ABM中の状態不安を喚起する実験パラダイムを検討する。

## 方法

**対象者**：Liebowitz Social Anxiety Scale (LSAS-J; 朝倉他, 2002) の得点が23点で社交不安症と診断されていない男子大学院生1名。

**手続き**：LSAS-Jに回答した後、状態不安を高めるために不安喚起課題を行い、ABMを行った。状態不安の程度を測定するために、不安喚起課題実施前後とABM実施後にVisual Analogue Scale(VAS)への回答を求めた。VASへの回答を求める教示は、PC上に呈示された。1週間後にLSAS-Jへの回答を求めた。

**尺度**：状態不安を測定するために、VAS(まったく緊張していない：0～非常に緊張している：100)を、社交不安傾向を測定するためにLSAS-J(24項目、4件法)を用いた。

**刺激**：Matsumoto et al., (1989) の嫌悪表情および中性表情を表出した日本人8人(女性4人)の表情画像を用いた。

**注意バイアス修正トレーニング(ABM)**：注視点が500ms呈示された後、同一人物の中性表情と嫌悪表情を呈した表情画像がPCの画面の上下に500ms呈示される。その後、プローブ(EもしくはF)が中性表情を呈した表情写真が呈示されていた位置に出現する。参加者には、マウスでプローブの種類を回答することを求めた。

**不安喚起課題**：山極他(2003)を参考に、「朗読している様子は撮影されトレーニング後、複数の大学院生によって視聴される」と教示し文章をビデオカメラの前で朗読することを求めた。

## 結果

各尺度の得点を表1に示した。

	ABM得点		
	不安喚起課題実施前	ABM実施前 (不安喚起課題実施後)	ABM実施後
LSAS-J		23	9
VAS	1.3	4.1	4.3

VASの得点は、不安喚起課題実施前と不安喚起課題実施後で比較すると、不安喚起課題実施後で得点が高くなっていた。また、不安喚起課題実施後とABM実施後で比較すると、ABM実施後で高くなっていた。LSAS-Jの得点は、ABM実施前とABM実施後で比較すると、ABM実施後で得点が低くなった。

## 考察

本研究は、ABM中の状態不安を喚起する実験パラダイムを検討することを目的とした。その結果、カメラの前で朗読を求めることで状態不安が喚起され、かつその状態不安はABM中も維持されることがわかった。また、社交不安症状の減少も認められ、状態不安を高めた状態でABMを行うことの有効性が示唆された。今後はサンプルサイズを増やし、統制群との比較を行い、状態不安を高めた状態で行うABMの有効性を検討する必要がある。